

關^{せき}の戸^と

中里恒子

關^{せき}の^と戸

昭和五十九年四月十五日 第一刷

定 價 一 千 五 百 圓

著 者 中里恒子

發行者 西永達夫

發行所 株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三―二三 郵便番號一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷 精興社 製本 矢嶋製本

萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします

Printed in Japan

目次

うす墨

7

うしろ髪

43

關の戸

71

ふるさとは要らない

97

旅びと

127

海を渡つて来る休日

157

冷めたい河

179

祈り

201

運轉手のセータア

217

停車場で

233

装幀・題字 著者
函 著者蔵の布裂

關
の
戸

う
す
墨

今年の春の頃から、梶野さんの娘が戻つてゐるときいた。さういふことは、片聞きでは、判断出来ない。どうしても、相手を非難しがちになる。

娘の両親は、温厚篤實な人柄で、出戻つた娘は、末のひとり娘であり、上は、二人息子である。そのこと自體は、両親の知りあひの者は、誰も、問題にしなかつた。強ひて言へば、やつぱりうまくゆかなかつた、といふ氣持が一致してゐた。

梶野さんの母親は、むしろ歸されたことを喜んでゐるであらうと、誰も、見舞ひにもゆかなかつたほどである。婚家から、出戻つた娘が、必ずしも不幸とはかぎらないので、他人が、口を出すことはないのである。娘の嫁ぎ先といつても、國內ではない。ふらんす國である。

相手は、ふらんすから日本へ、墨繪を習ひに來てゐた留學生で、梶野さんの父親の友人の、懇意な役人の息子であつた。梶野さん一家も、ふらんすに勤務したこともある官吏であり、先方も、官吏上りで、家も舊家で、まづ嫉も屈いてゐるし、梶野さんに息子も二人ゐる、何かと都合がよからうと、あつさりその息子を、家庭で世話することになつた。

末娘のことは、全然氣にしなかつたのである。

巴里大學を出てゐるミカエルは、父親の望む役所には就職しなかつた。自分の好む仕事につきたいと言つた。

「生活はどうするのか、」

「とにかくお父さんの事務所で働かして下さい、すこし時間を下されば、やりたいことを勉強する、」

「なにをやりたいのだ、」

「日本の墨繪です、くろ一色で、色彩のある繪を描きたい、墨は、日本の傳統だ、いろいろ見たい、日本へゆきたい、事務所で一年働けば、旅費は出来るでせう、」

「事務所で、特別扱ひはせんぞ、掃除、使ひ走り、電話番号、帳簿整理、全部見習ひ、よぶんの時間はないが、晝休みを二時間半やる、三十分で食事、そのあと二時間したいことをしてみなさい、それが勤まり、仕事をする能力があるとすれば、それからのことだ、わたしの事務所だと言つても、甘えは許さん、二時間の埋め合せは、六時まで残つて、残務を片づける、一年間やつてみるかい、」

「はい、」

「その上のことだ日本ゆきは……墨繪などで、生活出来るかどうか、わたしは知らんが、お前の才能次第だ、無駄かもしれぬが、若いうちに、自分で自分をためしてみなさい、世の中は、きびしい、甘くない、」

「わかりました、お父さんとは違つたゆきかたでやります、わたしは、法律は、興味がないんで

す、繪なら、名をなさなくとも、人間の自由の仕事ですから、おもしろい、」

「ばかを言へ、繪を描くのは自由だとしても、法律のやうに、かうすればかうなると言ふきまりはない、きまりがないだけ、能力がかぎりなく要る筈だ、」

「……」

ミカエルの頭の中を、畫帳で見た、鳥獸戲畫の動物や、大和繪の山水花鳥の壁畫などが、ちらちらしてゐた。そのほんものを見たい、筆に墨をつけて描くといふ技術を知りたい、繪具と墨の違いで、描くことは一つに思へる。

一年間は父親の仕事を手傳ひ、やつと日本ゆきを許された。梶野さんの家に、友人からのついで世話になり、繪の先生の手づるもついたミカエルは、希望にふくらんで出て來た。父親は、梶野さんに、二年間は最低の仕送りをするといふことで、つまり二年経つたら歸つて來いといふ約束で出て來たのである。

一生かかつて、到底、充分にはつかめないといふ墨繪を、二年間でといふのも無理である。

はじめから、それで食べるなどは考へず、趣味を深める意味で、父親は、ミカエルを修業に出したのであらう。ミカエルは、戦後の青年らしく、異國の手法をつかんで、自分流に磨きあげれば、その集中力で訴へるものが必ずあると、野心も旺盛であつた。

きよ子の父親は、自分の息子たちにも齒がゆさを抱いてゐたので、墨繪などといふ、奥の手に、いきなりとり憑いて來たミカエルを、好奇心と好感をもつて迎へた。

日本の傳統のよきものまで、悉く、若者たちが見向きもしなくなつてゐる矢先のことで、ふら

んす人のミカエルが、そこに眼をつけただけでも、仕送りなどはなくとも、ミカエルの希みをきいてやりたい氣なのである。

ミカエルは明るい性質で、きよ子の兄たちとも、ぢきに打ちとけ、きよ子にも優しくかつた。三月四ヶ月経つうちに、きよ子も、生かじりのふらんす語を、ミカエルに習ひ、ミカエルは、半覺えの日本語を、きよ子に習ふといふ風で、次第に親しくなつていつた。

母親が、それを氣にし出した。

「ミカエルさんは、息子たちより、きよ子に親切ですし、きよ子も、花など活けたりして……」
「さうか、うつかりしとつたが、きよ子も年頃だ、しかし、美しくはないからな親の欲目でも、」
「きよ子は、たしかに器量はよくありませんけれど、ルノアールの少女のやうだと言はれたつて、うぬぼれてますよ、ミカエルさんが、うまいこと言つたのでせう、」

生かじりの言葉で親しくなつてゆくうちに、どういふ誤解が生じるかもしれぬと、両親は、俄かに不安になりはじめる。ミカエルと、きよ子を、一つ家の中におけぬと思ひついたのである。

墨繪の先生に相談して、ミカエルを内弟子の形で、半年、一年でもおいて頂けぬかと打ちあけた。先生は、夫婦だけで、子女はみんな別に家庭をもつてゐる。

「よろしいでせう、通ふのも、續くまい、ミカエルがその氣ならおあづかりする、時々お宅へ遊びにゆく方が楽しいでせう、こちらへも、御兄妹でたづねて下さらんと、話を通じませんよ、」

「いや、だいぶ日本語を覺えました、先生のおそばなら、いつもお仕事も拜見させて頂けるし、雜用は、なんでもやらせて下さい……ところで、かかりですが、月謝は今までと同じにして頂い

て、食費その他、十萬ぐらゐでは御迷惑でせうか、」

「いやいや、そんなに要らんでせう、」

「先方からは、はじめに友人を通じて、十萬送つて來てゐますが、それはミカエルの小遣ひやお月謝や材料に使はせて、多少とも残れば、家内があづかつてをります、ふらんすは、仲仲こまかい使い方ですな、」

先生は、につこりした。

「當然です、金は、最小限がいい、若いうちは、足らぬがちで辛抱するのが藥ですな、金が要るのは、一人前になつてからです、ミカエルは、器用で、筆はこびもいいのですが、墨繪といふだけで、ふらんすでも食へるかどうか、それでもやり通せば、異色としてのなにかがあるかも、」

「ともかく、日本の若者が見放した傳統に、食ひついてきたのですから、そこは頼もしいと思つてゐます、」

結局、なんともつかず、十萬圓をそつくり先生におわたしすることで、ミカエルを預けてしまつたのである。

やれやれと思つてゐると、きよ子が、ミカエルにふらんす語を習ひにゆき出した。ほかにも學生が二人、勉強に來て、ミカエルと友達になつた。そのうち三人になり、學生たちは夜の部、きよ子は、特別に、晝のうちに濟ませる。ふらんす語そのものより、ミカエルに會ひたい爲にゆく

のである。

墨繪は、先生の墨をおろすことから、筆洗ひ、墨いろを見る幾つかの皿洗ひ、練習の紙の整理など、ミカエルの仕事であつた。先生のお手本を見て、何度でも部分的に習ふ。手直しをされて、一つものを四日も五日も描き、よいと言はれるまで、墨色、筆づかひを習ふ。ミカエルは、梅、櫻、竹、水、山などを描いてゐるうちに、お手本通りでない繪を描くやうになつた。

「まだ、基礎が出来てゐない、部分的にしつかりつかんでから、自分の櫻を描くのです、土臺が大事ぢや、一年は、筆づかひの強弱、墨色の濃淡を練習しなさい、」

日曜日と水曜日には、展覽會や、博物館見物に出かける。その時は、きよ子と一緒にいつた。

ミカエルも、アルバイトの小遣ひが使へるやうになると、きよ子を食事に誘ひ、心の通ひあひを、ふたりは意識し出した。きよ子の方が夢中になり出したのである。

「墨繪のどこがおもしろいの、」

「色があります、繪具にない微妙な色なのです、線が美しいのです、」

「……………」

「まだわかりません、けれども、わたしは、日本の心が感じられます、きよさんにも、日本そのまゝの傳統が、あなたを包んでゐるやうで、惹きつけられるのです、」

ミカエルは、墨繪のことを話してゐるつもりだが、きよ子は、自分にミカエルが戀をしてゐるかのやうに受けとつた。

「わたしも、ミカエルの氣持わかるの、ふたりだけの祕密ね、」